

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS, PART 1B

Japanese Studies

Monday 9 June 2014 13.30 – 16.30

J.5 MODERN JAPANESE TEXTS 2*Answer **BOTH** sections.**Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.***STATIONERY REQUIREMENTS***20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad***SPECIAL REQUIREMENTS***none*

**You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.**

SECTION A

(1) Translate the following passage from an **unseen** text into **English**:
[40 marks]

家政婦さんは、わたしと同年輩の、普通の家庭の奥さんです。朝九時から、一日がかりで掃除をして、そして、帰るまえにわたしの家族のために夕飯の用意をしてくれることになりました。家政婦さんのくることになった初めての日、わたしは、いつもどちがって、ゆうゆうと駅からの帰路を歩きました。家族のためにあわただしく夕食の支度をしてやる必要がないからです。家政婦さんが、なにもかもうまくやってくれたことでしよう。

「ただいま」

老母がひとり、居間でテレビを見ていました。

「子供たちは？」

子供たちは、それぞれ二階の自分の部屋にいました。

「食事は？」

わたしはテーブルの上を見渡しました。母がきれいに片付けてくれていました。

毎週この日は、主人も留守になる日なのですが、その日、都合で主人も家におり、やはり、自分の部屋で仕事をしているようです。母がわたしに主人のことを報告しました。

「家政婦さんが作ったギョウザが出来あがるのを待ちかまえるようにして、それをサカナにビールを飲んだのよ」

そして、わたし自身、疲れきったからでテーブルにむかい、わたしのために残された冷たいギョウザを食べました。ギョウザを食べながら、自分が主婦であるべきこの家で、ひとの作ったもので、遅い夕食を一人で作っている自分の姿に、ショックを受けました。

わたしが夕食を作ってやらなくても、子供たちには何事も起こらなかった。主人にも何事も起こらなかった。あまつさえ、ビールのサカナまで手に入れた……家政婦さんがみんなやってくれた……。

これが、家族の作った料理であったなら、なんでもなかったことでしよう。店屋もの、おそうざい屋のものです。今までのだって、たびたびあったことです。

夫の浮気の相手が、商売女なら許せるが、しろうとであつたら許せない、という感覚は、経験したことはありませんが、店屋ものと、家政婦さんの作ったものとの違いに通じるかもしれない、ふと思います。人によっては、商売女でも、店屋ものでも許せない、というけっぺきな女性もいることでしよう。

KIMURA HARUMI, 'Shufu ga shufu denaku naru toki' in *Shufu no tenkizu* (1982), pp.11-3.

家政婦 housekeeper, ゆうゆうと calmly, in a leisurely manner, サカナ side dish, あまつさえ and what's more, おそうざい屋 takeaway shop, 浮気 cheating, しろうと amateur, けっぺきな fastidious

SECTION B

Translate **TWO** of the following passages from **seen** texts into **English**:
[30 marks each]

(2)

死にますとも、と云いながら、女はぱちりと眼を開(あ)けた。大きな潤(うるおい)のある眼で、長い睫(まつげ)に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸(ひとみ)の奥に、自分の姿が鮮(あざやか)に浮かんでいる。

自分は透(す)き徹(とお)るほど深く見えるこの黒眼の色沢(つや)を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍(そば)へ口を付けて、死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうにたまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私(わたし)の顔が見えるかいと一心(いっしん)に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、埋(う)めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片(かけ)を墓標(はかじるし)に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢(あ)いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていられますか」

自分は黙って首肯(うなず)いた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

(TURN OVER)

Question 2 continued...

「百年、私の墓の傍(そば)に坐つて待つていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待つていると答えた。すると、黒い眸(ひとみ)のなかに鮮(あざやか)に見えた自分の姿が、ぼうつと崩(くず)れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫(まつげ)の間から涙が頬へ垂れた。――もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑(なめら)かな縁(ふち)の鋭(す)るどい貝であつた。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿(しめ)つた土の匂(におい)もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片(かけ)の落ちたのを拾つて来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちている間(ま)に、角(かど)が取れて滑(なめら)かになつたんだろうと思つた。抱(だ)き上(あ)げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖(ぬ)くなった。

自分は苔(こけ)の上に坐つた。これから百年の間こうして待つているんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石(はかいし)を眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それがまた女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定(かんじょう)した。

(3)

加藤 あつ、それはすごいね。今でもインドの大きな問題の一つは、階級間の深み、ぞでしょう。その第一の要因が経済的格差、第二の要因が言語。

丸山 すごいんだ。インドの例をちゃんと引き合いに出して、上下とも、国民は同じ言葉をしやべらなければいけない、と言っている。

加藤 インドには、どの地域にも通じ、どの階級にも通じる言葉はなかった。政治家が全国を遊説するのに、英語で話せば、地域の差を超えてどこでも通じるけれど、それは上の階級の人々に対してだけ。特定の地域の言葉で話せば、その地域の人々には階級を超えて誰にもわかる。しかし、別の地域の人々にはまったく通じない。これは容易に解決できないデイレンマでしょう。条件の違う日本で、わざわざ英語を導入するのは愚かだ、ということですね。

丸山 森みたいに、英語を国語にしろという議論も、さっき加藤さんがいったような時代だから、非常におもしろい。馬場は、言葉がちがつてしまえば一つの国をなさないだけではなくて、下層階級の多くは国事の重大問題から締め出されるだろう、という危惧を述べた。つまり、英語をものにするのは大変だから、一般大衆とエリートと言葉が二つできて、重要なことがみんな英語で処理されることになれば、英語をしやべるエリートだけが国事をやることになってしまって、大衆は国事から疎外されるだろう、と言う。そういう長い序文があるのです。

加藤 社会を上下の階級的構造として見ることに、その階級をそれぞれの文化と結びつけて考えること——これはその当時、誰も明瞭には意識していなかった洞察ですね。

(TURN OVER)

Question 3 continued...

丸山 ところが、英語採用論というのは現実には問題外だったものだから、明治二十一年版の序文では、そのくだりを削除しちゃった。つまり森に対する反駁だからね。明治六年の段階では、まだどうなるか、わからなかったんですよ。混沌としているときでしたから。でも、明治二十一年にはもう、英語を国語にするなどということはありえない。だから、そこを削除しちゃった。

死んだあと、明治三四年(一九〇一)に三版が出ています。この本の内容をみると、増補版では、例文が非常に増えていて、日本語の用例がおもしろい。「なんとかでござります」とローマ字で綴って、それに英語が書いてあるようなものばかり。日本語の説明のなかでおもしろいのは、プレポジション＝前置詞のところ、これは本当は「ポストポジション」といふべきだといっている。日本語では「江戸に行きます」と後ろにつけるので、本当は後置詞といふべきなのだけど、それにあたる英語はないし、イギリス人にわからせるために、便宜上、プレポジションという言葉を使う。そこで「……に」とか「……へ」とかの説明にあたって、後置詞という言葉であるべきだと、わざわざことわっているのです。これは大したものだ。

(4)

「君が嫉妬のことを言ったのは正しい。やはり僕も人並みに嫉妬したよ。嫉妬が嵩じて僕は馬鹿なことをやからしたのだ。ある明け方、首は逢引から帰ってきた。首が実際に飛んでいるところを見たのはそれが初めてだったが、首は耳を翼のようにはばたかせて巨大な虻みたいな羽音を立てて飛ぶ。飛頭蛮の流儀はそういうものらしいね。その時、帰ってきた首は上気していかにも喜びに溢れている風情だったから、こちらは怒り狂ってしまった。それでとっさに切り口にシーツをかぶせて首が接着できないようにしてやったのだ。首は困惑してあたりを飛びまわるが、許しを乞う様子もない。どうやら苦悶の態なのだ。殺虫剤を浴びて狂い死にする蠅のような苦しみようだ。ざまあ見ろと思って見ていると、あっけなく事切れてしまった」

「むごいことをしたものだ」

「それはそうだが、もう後の祭だった。首は見る見る生気を失って皺だらけになりながら、信じられないほど小さく縮んでしまった。これがそうだがね」

Kはそう言うと、その身なりに不相応なボストンバッグを開けて問題の代物を取り出した。思わず叫び出しそうになったが、もう制止する暇もない。それは土偶の首のようなものだった。一度見ると目を外らすことができないものだ。特に私にはね。何しろ、それは生前毎晩のように飛んできてくれた忘れられない顔のなれの果てだったからね。

ここからの話は勿論父がK氏にはしなかった部分である。麗という美少女の首は、夜毎に父のところへ飛んできたのだった。最初、何か鳥のようなものが窓ガラスにぶつつかる音がして、甘えた仔猫に似た声が聞こえたという。父が深夜その首を窓から入れて、机の上で冷たい髪を撫でながら、どんな睦言を交わし合ったのか、父は多くを語らなかったが、想像してみることはできる。しかしそういう話をした時の父の顔は正視に耐えなかった。「死んだお母さんはこのことを知らない。だがお前にはいつか話しておく必要があると思っていた。その理由は……」と言いかけて父は一瞬ためらった。

「その前にKのことだがね。Kは首を殺したことになるが、それから何日か、胴の方は生きていた。やがて胴も弱って死んでしまうが、その前に女の子を生んだ。首のない体から可愛い女の子が生まれた。Kは大変な猟奇事件の犯人ということで逮捕されたが、分裂病と診断されて不起訴になった。女

(TURN OVER)

Question 4 continued...

の子は私が引き取って自分の子として育てたんだがね。お前に言うことはそれだけだ。お前がその、例の病気を受け継いでいるかどうかを確かめてみる
勇気はいまだにない」

父が急死したあと、私はこの父の話を数え切れないほど反芻^{はんすう}してみた。今のところ私には恋人がいない。夢で恋人に逢^あったこともない。首はまだ飛びはじめてはいないと思う。人を愛することさえしなければ首は飛ばないと思っている。

KURAHASHI YUMIKO, 'Kubi no tobu onna,' in *Kurahashi Yumiko no kaiko shōhen* (1988), pp. 36-8.

END OF PAPER